

## 第二節 イオニア反乱

イオニア反乱とは

前 499～494 年

ペルシアの宗主権下に戻る

ミレトスはペルシアによる報復

ペルシア戦争のプロトタイプ

反乱の原因

僭主制への反感と民主政への願望

経済的苦境

反乱の実情

カリヤやキプロス島にまで波及、しかし広がりは限定

アリスタゴラスの構想＝バルバロイ対ギリシア人という対決実現に失敗

ギリシア本土の共感と支援を得られなかった

ハリカルナッソスなどのドーリス人諸都市は参加せず

アイオリス人諸都市は冷淡

ヘレスポントスやプロポンティス地方の諸都市は消極的

→ペルシアと対峙するギリシア人を組織化出来ず

イオニア人も統一されておらず

引き渡された僭主: 一例を除いて追放

ラデの海戦: サモスー離脱; レスボスー続く

イオニアの意義

はじめて大義名分を掲げ正当性を主張

民族主義的イデオロギーの創出

初めてバルバロイの圧政に対するギリシア人の自由

アジアの豊かさと劣勢

リュディア時代には見られない

ペルシア時代初期にも見られない

このとき初めて提唱

反乱は失敗、理念はギリシア人の間に広がり定着

イオニア反乱は歴史における単なる一挿話ではない

オリエンタリズム批判にまで繋がる

本講の目的

何故イオニア反乱が起きたのか

ヘロドトスに関して研究者の見解: イオニア人に対する偏見

ヘロドトスはアリスタゴラスの個人的事情と思惑に反乱の原因を帰す

研究者:背景にあるイオニア人の不満が反乱の原因

僭主制に対する不満或いは経済的苦境に原因

イオニア諸都市の多くが基本的には少数の有力者が政治を独占する寡頭制

→ヘロドトスの見方が真実に近い

アリストゴラスの権力基盤:ペルシア総督の信頼関係

→カタイオスを含む有力者を仲間

僭主追放後:僭主を支えていた母体、即ち有力者の党派は温存

これまでの研究の問題点:

僭主たちの逮捕とそれに続く「イソノミエ」の樹立を過大評価

イオニア反乱の原因:

僭主を支えていた少数の有力者たちの意向

利率的に反乱に追い込まれていったアリストゴラス

親ペルシア派の人物を反乱へと追い込んでいったペルシアの支配体制

イオニア反乱についての最近の研究

ヘロドトス:アリストゴラスの自己保身とヒステイアイオスの野心

ヘロドトスにはイオニア人に対する偏見

事実として受け容れることは出来ない

研究者がヘロドトスに対して批判的な理由:

イオニア人に対する軽蔑

艦隊での人々の反応と僭主制の廃止の広がり=

個人的動機に納め切れない大衆的反ペルシア感情の広がり

研究者の着目点:

政治制度史的な視点からする説

僭主の逮捕と僭主制の廃止によってイオニア反乱が始まったこと

イオニア人に押し付けた僭主制は最早時代遅れ→人々の支持を得られなかった

→僭主制に対する大衆的な反感こそがイオニア反乱の原因

経済的困窮から反乱の原因を求める

レンシャウ(Th. Lenschau)にはじまる(Th. Lenschau, "Zur Geschichte Ioniens," *Klio*, 13, 1913, S. 175-183.)

ハーゼブレック(J. Hasebroek)の疑問(J・ハーゼブレック、原随園・市川文蔵 訳、

『都市国家と経済』、創元社、昭和一八年、212-218頁)

オズウィン・マリー(O. Murray)による復活(Murray, "Revolt", pp. 461-490.)

ナウクラティスなどでの考古学調査→イオニアの対外貿易の不振から来る経済的後退が

ペルシア支配に対する不満をかき立て、それが反乱の原因となった

僭主支配に対する不満の高まりと経済的困窮からイオニア反乱の勃発を説明する説

## ジョージスによる批判

ペルシア王の好意を巡る熾烈な帝国官僚同士の争いが敗者を反乱へと追いやる

(P. B. Georges, “Persian Ionia under Darius: The Revolt reconsidered”, *Hist.* 49, 2000, pp.1-39.)

バルサー (J. Balcer)の研究を背景

(J. M. Balcer, *Sparda by the Bitter Sea: Imperial Interaction in Western Anatolia*, Chico, 1984.)

反乱の直接的な原因はメガバテスの越権行為 (Georges, “Persian Ionia”, pp. 17-18.)

イオニア人は僭主制の廃止を望んだが、ペルシアとの全面戦争を望んでいなかった

ペルシアも同様に戦争を回避しようとしていた (Ibid. p. 25.)

事態を大きく変えてしまったのはアテナイとエトリアからの援軍 (Ibid. pp. 25-26.)

キーナスト (D. Kienast)の批判 (Kienast, “Bemerkungen”, S. 1-31.)

ブリアン (P. Briant) (P. Briant, *Histoire de l’ Empire perse de Cyrus à Alexandre*, Paris, 1997.) やバルサー (J. M. Balcer, *The Persian Conquest of the Greeks 545-450 B. C.*, Xenia 38, Konstanz, 1995.)の最近の研究をジョージスは等閑視 (Kienast, “Bemerkungen”, s. 1.)

ペルシアの支配がその副産物としてギリシア人の共同体意識・共属感情を作り上げていった

ことが反乱の原因 (Ibid. s. 18)

ペルシアの支配からの解放が目的

ジョージスのように僭主を放逐することだけが目的だったのではない (Ibid. s. 19.)

## エヴァンズ

ギリシア民族意識の高まりがイオニア反乱の原因 (J. A. S. Evans, “Histiaeus and Aristagoras”, *AJP.* 84, 1963, pp. 113-128.)